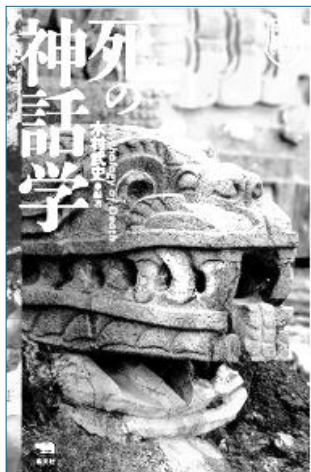


死の神話学

植朗子（他）著



庄子 大亮（評）

ここで取り上げるのは、神話における死の表象と意味を問う木村武史編『死の神話学』であるが、なかでも本会の会員・植朗子が寄稿した第 12 章に注目する。論集全体の内容についてここで語り尽くすことは（その内容の豊かさゆえに）かなわないわけだが、植論考は全体のコンセプトをよく具体化しているため、本論集の魅力や意義が植論考によって自ずと示されることになろうかと思う。

伝承文学のなかでも「ザゲ Sage」すなわち「伝説」を主に研究している植は、19 世紀に民間伝承を蒐集してドイツ民俗学の基礎を築いたグリム兄弟の『ドイツ伝説集』をここで素材とし、ストーリーに影響を与える「モチーフ」の観点から、死に関わる伝説を分析していく（筆者・植は、事実性が意識される伝説と、必ずしもそうではない神話の違いも意識しつつ、両者が重なり合うところで神話的伝説という表現も用いている）。析出対象とされる物語・モチーフは、異様な長命、死を奪う神と死を与える神、死者の魂を管理する精霊、肉体から抜け出す魂、復活を待つ王や英雄、不滅の植物など、まことに多様で、かつ興味深い。死と生という普遍的テーマであればこそ、各々の

文化状況などを映し出しながら紡がれてきた多様な物語を扱う本論集において、植論考は見事な縮図ともいえる。

そして筆者は、伝説集の編纂意図にも注意を払いつつ論をまとめていく。死からの救済の物語には恐怖や絶望を緩和・回避させる作用がある一方、人間らしい死、自然な死は不幸なものではないし、死があるからこそ生が意識される。死とともに生の意味もあることを結論とするのは、わかりやすく説得的だ。

ただし、多彩な例を挙げてくれていればこそ、個別に、より詳しく、それらが語られた背景や影響などを知りたくもなる。また多彩であればこそ、整った結論に必ずしも還元できない解釈がありはしないだろうかと、ときに感じる。しかし、そういった評者のうがち過ぎかもしれない見方も、筆者・植が注視してきた研究素材の豊かな意義、さらなる研究展開・深化の可能性を示すともいえ、けっして否定的なものではない。

本論集は、上述のように植論考を典型として、死そして生について語る世界中の神話についての論考が 14 編も収録されている。読み手側が各論・各神話を比較することで、本論考および本論集から学べることはさらに増すであろう。ドイツの伝承文学、民俗学といった直接的に関わる分野の方はもちろんであるが、神話・伝承研究の魅力、意義を広く伝えるものとしても、植論考また本論集を多くの方にご覧いただきたいと思う。

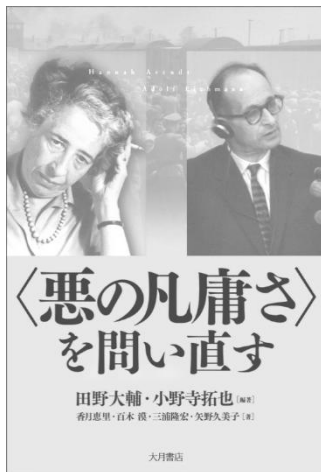
『死の神話学』晶文社（2024 年）所収

木村武史編 植朗子（他）著

晶文社 本体価格 2800 円

〈悪の凡庸さ〉を問い直す

香月恵里（他）著



二井 彬緒（評）

思想家ハンナ・アーレントの概念に対し再考を促す、知のプロセスのような一冊である。アイヒマンを〈悪の凡庸さ〉という言葉で論ずることは適切なのか。この問いを軸に歴史、文学、哲学、思想史研究者による議論を収めている。リングでは決着がつかねばならず、ヒールはアーレントだ。だが、ヒール化されることでアーレント思想の魅力にライトが当たった一冊だろう。

たしかにアーレントがアイヒマンを「凡庸な役人」としたことは歴史記述的な誤謬を含んでいる。他方、アーレント研究でアイヒマンをめぐる記述は不問だったのか、という議論はかなり蓄積されてきている。例えば蛭田圭は *Hannah Arendt & Isaiah Berlin* (2021) にてこの点をわかりやすくまとめている。いわく、アーレントはアイヒマンをソフトに評価したわけではなく、厳しく追求しつつ「異常者」像に落とし込まないようにし、また「小さな歯車」とも考えず、むしろ彼の役割は彼自身が認識していた以上に大きなものだったと捉えていた。さらに『エルサレムのアイヒマン』は悪に関する書ではなく、不法国家における道徳的判断をめぐる哲学書である。近年はこの点から

『アイヒマン』を論じる研究も増えてきている。

本書に立ち戻れば、アーレントがアイヒマンを〈悪の凡庸さ〉と記述したことでアイヒマンの誤った像——権威に従い、周囲に同調する無能な人物というイメージ——が蔓延している面は実際にある。この像を正すために歴史研究者がアーレント（を論じる哲学・思想研究者）に問う形となり、二領域があたかもリングで対峙するレスラーのように見える。だが、とりわけ本書第二部の著者らの対話では、〈悪の凡庸さ〉という言葉によって、重要な問いが浮かび上がってくる。歴史研究は「実証可能かどうか」「今後使えるか」によってこの概念の正否を確認しようとする。しかし、文中で矢野が繰り返したように、この概念自体、実証主義的な基準で測るものではない。このやりとりを通して他分野同士ゆえの視点の相違が見えてくる。そして歴史学と哲学・思想の両分野間の対話は、アイヒマンは猟奇的で特殊な人物か（個別具体的な像）、もしくはどこにでもまた現れ得るような人物か（普遍的な像）という問いかけへと向かっていく。それ自体、まさに〈悪の凡庸さ〉が投げかける本質的な問いである。

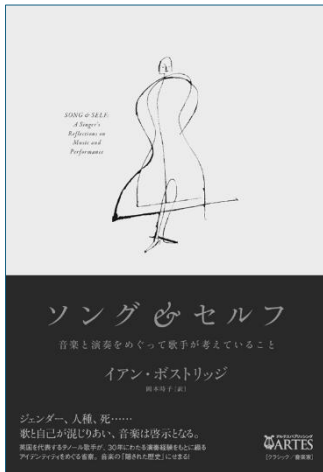
またアイヒマンの存在は個別具体的か普遍的なのかは、本書では議論が開かれて終わっている。構図として似ているのは、ショアは一回限りの絶対的なのか、再び起こりうる出来事なのかという、欧米を中心に噴出している問いである。ショアを絶対化するゆえにナクバとショアを並列化することが検閲され、世界史において不可視化された複数のジェノサイドがある。多分野の研究者が協働することで再び、かつ新しく見えてくる知のあり方もあるはずだ。本書はその土台を提示している。

『〈悪の凡庸さ〉を問い直す』（2023年）

田野大輔／小野寺拓也編著 香月恵里（他）著
大月書店 本体価格 2400 円

ソング&セルフ—音楽と演奏をめぐる歌手が考えていること

イアン・ボストリッチ著 岡本時子訳



大貫 敦子（評）

演奏者とは何か？ 西洋音楽では演奏は作品の「解釈」だと言われることが多いが、理想的な解釈とは解釈を行わないこととする考えもある。これに対して自身が歌手でもある本書の著者イアン・ボストリッチは、作品と解釈との関係について「歌が歌手を歌わせている」瞬間があると言う。その瞬間はまさに「アイデンティティをめぐる冒険」であるという。歌を演奏する者は、芸術が生まれてくる背景を過去・現在・未来を結びつける「創造性に富む流れの一環として理解する責務」があるという言葉に、本書の一見謎めいたタイトル『ソング&セルフ』の意味を読み取る鍵があるかも知れない。

イアン・ボストリッチは世界的テノール歌手として数々の演奏活動とならんで、オクスフォード大学で近代史の博士号を取得し、哲学や歴史的観点から論じる著作活動でも有名である。すでに『シェーベルトの「冬の旅」』（邦訳 2015 年）も、歴史や文化史に基づいたテキスト解釈と作品論を展開し、狭い意味での音楽研究者ないし演奏者の枠をはるかに超え、研究者かつ歌手という複合的な視点に立つ秀逸な考察である。

本書を貫くテーマの一つ「ジェンダー」（第一章）では、歌手の性アイデンティティが作品中の人物の性とどう関わるのかについて、ジェンダーの役割の逆転が生じるモンテヴェルディの『タンクレディとクロリンダの戦い』や、シューマンの『女の愛と生涯』を例として、女性役を男性が歌う意味を問うている。なかでも関心をひくのがベンジャミン・ブリテンの『カーリュー・リバー』の考察である。日本の能『墨田川』から着想を得て作られたこのオペラ作品の 2013 年の上演で、ボストリッチ自身が「母親」を演じるなかで、その「母」は性別を越えた親であり、性別を越えた人間だったと回想している。

さらに第二章では、クラシック音楽の上演では「不朽の名作」とされるモーリス・ラヴェルの『マダガスカル島民の歌』が、単に想像のなかに存在する異国の話ではなく、「ヨーロッパ人にとって意識された他者、暴力と権力関係の物語」として問いただされる必要がある作品だと言う。この章ではボストリッチの歴史家としての考察、そしてポストコロニアルをめぐる言説への洞察が鋭い。

「死」をテーマとする第三章では、ブリテンの『戦争レクイエム』と『ヴェネツィアに死す』が論じられる。『ヴェネツィアに死す』はトーマス・マンの作品に基づいているが、ブリテンのオペラには、強い性的衝動が感じられると言う。エロスとタナトスが死に向かって凝縮されていくこの章は、ベンジャミン・ブリテンと彼のよきパートナーであったピーター・ピアーズへのオマージュとも読める。

『ソング&セルフ—音楽と演奏をめぐる歌手が考えていること』（2024 年）

イアン・ボストリッチ著 岡本時子訳

アルテスパブリッシング 本体価格 2600 円